The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 懐徳ということ |
| Author(s) | 蔵内, 数太 |
| Citation | 懐徳. 1985, 54, p. 5-8 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/90640 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 懐徳ということ

蔵内数太
（大阪大学名誉教授）

懐徳堂の名の由来について、西村天囚は、それは『論語』の「君子懐レ徳、小人懐レ土」より取られたとした。これは今日通説となっている観がある。ところで本誌前号で阪大の黒田俊雄教授は、君子対小人はもと治者対庶民の区別を意味するので、町人の学府であった懐徳堂の名の出典論としては、右の説は適当でないのではないかとの疑問を出された。これにはわたくしも同感で、最近適々塾の名の出典に関して述べた折、附随的に言及したところでもある（『適塾』一六）。この度本誌に執筆の機会を得たので、重ねて「懐徳堂」についての私見を記してみたい。

懐徳堂は享保十一年三宅万年の論語・孟子の首章講義によって発足したが、万年はまたその筆になる懐徳堂の扁額をも遺している。しかし堂号の出典については記録はないようである。

懐徳堂の文字は、前記論語のほかに中庸の末尾に「詩に云く予明徳を懐ふ」があり、また尚書周書に「王、殷をして乃ち承叙せしめば、万年、それ永く朕が子を観て、徳を懐はん」などがある。この後者の言葉は周公が成王に与えた訓戒で、周の武王によって殷は亡ぼされたが、武王の後嗣の成王が善政を行えば、殷の遺民は周室の厚徳に懐くであろうという意味である。ここに用いられている「懐徳」の言葉も四書五経の素読ぐらいは修めた当時の大阪の人々にはなじみあるものであった筈であ

る。そして元和落城後の大阪町民はいわば殷（商）の遺民に比せられないこともない。それは別としても、懐徳堂の創立を幕府が許したことは、大阪町民に対する徳川幕府の善政であったことは言うまでもない。したがって尚書の「懐徳」の文字の方が、懐徳堂の名の源とするに適わしいように思える。その上「懐徳」の文字は特定の人物の徳をおもう意味で用いられたのがむしろ多かったのではないか。島津日新公や紀州徳川の藩祖の社の扁額などに見られる「懐徳」はその例と言えよう。

懐徳の文字は懐徳堂自体ではどのように解釈されていたのであろうか。中井竹山は「懐徳堂記」でその父甃庵の解釈に触れている。甃庵の説に関して、「かつてひそかにこれを論ず」と前置し、徳は得であり、人がその固有の善、当然の則を知れば心に得られ、行えば身に得られるもの、若し懈らず（おこたら）これをつとめ、思念しておれば、聖となることが出る、これが孔門の訓えているところであると述べている。ここには特に君子のこととしては引かれていない。中井履軒は竹山とは性格も異なり、特に王覇の別にきびしく、江戸時代をもって有道の世とは認めなかったが、その『論語逢原』で、「君子懐レ徳」の徳は本然の性でなく、事実上の得であると解しているにとどまり、懐徳堂号の由来について述べるところはなかった。竹山も甃庵も堂号の由来についての伝承を確定的に伝えているのでもない。竹山はその時代を有道の世としたから、『草茅危言』を書き（論語――邦有レ道、危（たかくし）レ言危レ行）、特に家康の功業を讃えて『逸史』を著した。これは尚書の意味の懐徳の実践であったと言えよう。この本が覇府に献じられたときの「進逸史箋」の文字は注目を引く。これは短い文章であるが、論語の懐徳でなく、尚書の懐徳の趣旨を表現している。徳川の治を讃えて、「長く西周礼文の化を観る」と言っているのはそれである。

懐徳堂が事実上幕府のイニシアティブに由来し、大阪の町民の教育のために幕府が垂れた殊遇であ

れば、これに感謝する意味の堂号がその創立当時採用されたとしても、異とするに足りないことである。ただしこれは明治末の懐徳堂復活運動にとってはそぐはない。そこで天因は、堂号について深く立入らず、簡単な説明で片附けたのかも知れない。

このように書いても、わたくしは懐徳堂の文字を貶斥しようとしているのでは決してない。むしろ与えられているこの文字の意味を拡充して考えたいのである。懐徳の文字はいずれにせよ歴史的なものを積極的に評価する意味をもっている。また家康による学芸復興の動機は何であったにせよ、それが二百六十年の学芸の発展に与えた意義は極めて大きかった。江戸時代の知的進歩が日本の近代の礎石となったことは、充分認識されなければならないことである。

懐徳堂の中心は儒教にあったが、儒教は「倚らしむべし、知らしむべからず」の封建的学問で、それの否定の上に日本の近代は築かれたと考える人が多い。しかしこの言葉の意味は、人民の政治に対する理解を獲得することは困難だという否定できない事実を指摘したものと解するのが定説である。前の解釈は元来知を重んず立場に立つ儒者の本質を考えないものである。皇帝と知識人――儒者とは中国の歴史における二つの力であったとフランスのピエール・ラフィットは言った。（その『中国文明史論』の英訳はすでに百年前横浜で出されている。）またフランス革命前夜の思想に儒教が大いにかかわっていたことは、今日周知のところである。日本でも、儒教の与えた唯理主義的批判精神が維新の大きな原力となった。欧米人は最近の日本の経済的発展の歴史的・文化的背景をよく問題とするが、ひとしく江戸時代の学問の意義に注目している。中井竹山は「蒙養篇」で「商の利は士の知行、農の作徳なり。義にして利にあらず」と書いているが、これは資本主義の発生を論じたマックス・ウェーバーを考えこませるような言葉と言えよう。

三宅万年はその学風が鵺学問と言われたほど包容的であったが、懐徳堂は歴史的にはただの朱子学の府ではなかった。維新の運動に至大の関係のある陽明学にも、藤樹・蕃山・中院通茂・三輪執斎・甃庵・竹山・佐藤一斎の系譜において懐徳堂は重要な位置を占めている。近時喧伝される山片幡桃の思想はもとより、極めて独創性の高い富永仲基における思想の動学、また一部の『訳鍵』をたよりに独学でオランダ科学書を読破し、オーギュスト・コントと同時代に、近代諸科学の全体系を論じた竹山門下の帆足万里などを考えると、日本の近代を準備した懐徳堂の意味は極めて大きい。そしてこれらが江戸時代における儒学の振興にまつわっているのをしのぶことは、今日における「懐徳」の意義と言えないであろうか。

さらに蘭学における緒方洪菴や緒方研堂の漢学・国学に対する尊重を思うとき、懐徳堂の意義を回顧することは、また適塾の意義を回顧することにもつらなり、本来大阪の学問は関連的に回顧さるべきではないかということに思い到られる。尾張の真野時縄の『本朝学原浪華鈔』（一七一六）はこの浪華の学問を、王仁より始めて、天囚が『懐徳堂考』の筆の始めて置いた南浦文之（父は河内出身）や如竹の活動に及んでいる。わたくしはいま新しい浪華鈔として大阪学芸史を広く総括研究することが重要であると思っているのである。